

## 6 . 久田見祭



4月21日、岐阜県加茂郡八百津町久田見、白髭神社の祭である。自宅のある愛知県最北端犬山市から車でほぼ1時間。からくりの祭としてつとに有名でありながら、今まで見たことがなかったので、期待に胸弾んだ。

八百津は木曾川と飛騨川の合流する地点、民謡木曾節にあるように木曾材をこの地で筏に組み、犬山まで流してくる中継地でもあった。久田見祭はそんな、木曾と飛騨と美濃が混血し、尾張へ至る山間の小さな部落に凍結され、春風に解凍された絵巻物の世界だった。

「だんじり」と呼ぶ曳山が6台、白髭神社と神明神社にお練りする。背中に大きな御幣

を担いだ馬が「だんじり」を先導する。「だんじり」のからくり奉納の前に獅子が舞う。祭の原型がきちんと継承されていて、まず感心した。ここの祭の一大特徴は、「糸切からくり」と呼ぶからくりの様式にあり、国の文化財指定になっている。

6台の「だんじり」は二輪車で高さ5メートルくらいの2層構造、彫り物もよし、水引幕も鮮やか。上階で舞うからくりは毎年演目を変える。同行したロボット研究者の末松良一さんが、これはまさに江戸時代のロボットコンテストだと表現した。犬山祭も当初は二輪車の大人車で曳いた記録があるが、大人車が曳山の原初の形である。

年々過疎化している地域らしいが、逆にこの祭が過疎化に歯止めをかけていることが確実な証拠は、祭を楽しむ住民の表情がいい。この部落の人たちの一年はこの祭のためにあるに違いないし、2日間の祭のために絶えず準備し身構えていると思われる濃密な空気が

そこにはあった。寄合が、人と人との絆を生み、支え合う共同体を形成しているのだ。そしてその中心にご先祖を祀る神社があり、歴史継承への求心力の精神性を育むという構図だ。

桜は満開より散り初めがよい。盛りを過ぎた桜が、はらはらと祭を楽しむわれわれの頭上に舞った。暮れ泥む帰り道、春風が山里に運んでゆくあの祭囃子は、体に染みついた日本の旋律であった。